

杜甫の「望郷」と兄弟愛

竹村，則行
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7337151>

出版情報：中国文学論集. 53, pp.1-14, 2024-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

杜甫の「望郷」と兄弟愛

竹村 則行

一 はじめに

筆者は、前稿「杜甫詩の「花」と「鳥」——「春望」私考^①」において、杜甫「春望」詩（〇一四八^②）における「花」と「鳥」の形象について、以下の解釈の追加について些か提言した。即ち、従来は概ね作詩当時に杜甫が偶々長安で見かけた春の実景を描いた以上には解釈されなかつたと見られるが、時間は二年ほど前後するものの、「憶弟二首其二」（〇二四九）に表現する「故園花自發 春日鳥還飛」の酷似表現に依拠すれば、杜甫においては、「花」と「鳥」は、実は杜甫一族が団欒し、今は生別不明となっている少年時代の故郷での甘美な生活を回憶し、杜甫の深い家族愛を象徴するキーワードとして使用されているのではないかと。清・仇兆鰲『杜詩詳註』卷六が、「花發鳥飛、即濺淚傷心意。」として、「春望」「憶弟二首其二」両詩の共通性を指摘するものこの点を鋭く指摘したものと考えられる。

本稿は、前稿の視点を踏まえ、対象を杜甫詩全体に敷衍して、杜甫詩に現れた数多くの内乱で行方不明となった家族を心配するその他多数の兄弟回憶詩について個別に分析し、杜甫の戦下における家族愛について検証を試みたものである。更に、その晩年の畢生の大旅行には杜甫の二弟、二子も同行しているが、そのことが今日に伝わる所謂「杜甫詩集」の成立と構成に与えた影響についても、可能な限り推察し、また二十代以前の杜甫の詩文の伝承が今日殆ど無いという問題についても困難ながら言及を試みた。数多い杜甫詩研究論考において、望郷や兄弟愛につ

杜甫の「望郷」と兄弟愛

いて論究した先行論文は多数存在すると思われる。類似する先行研究の調査が必要であるが、本稿では諸般の事情からそれらの検討は甚だ手薄であることを恥ずかしながら予め白状する。また関連詩篇を列挙する以下の二章において、説明の必要上、「春望」「憶弟其二」の作詩時期、内容、特徴その他については筆者の前稿と重複することも容赦願いたい。

二 春望（春望、〇一四八）

國破山河在	城春草木深	國破れて山河在り	城春にして草木深し
感時花濺淚	恨別鳥驚心	時に感じては花にも涙を濺ぎ	別れを恨んでは鳥にも心を驚かす
烽火連三月	家書抵萬金	烽火 三月に連なり	家書 万金に抵る
白頭搔更短	渾欲不勝簪	白頭 搔けば更に短く	渾べて簪に勝へざらんと欲す

【説明】

①時期・場所・年齢……至徳二載（七五七）晚春三月。四十六歳。長安。

②内容……「感時花濺淚 恨別鳥驚心」とは、次に挙げる「憶弟其二」に同様に「故園花自発 春日鳥還飛」と回憶するところから、仮に杜甫が長安で実際に見聞した晩春の花、鳥の声を契機にして詠んだとしても、その主要な関心は杜甫が曾て少年時代に洛陽の陸渾荘で一族揃って楽しく過ごした少年時代の日々を思い出して、深い感慨に捉われて書いたものと考ええる。この点、従来の大方の解釈は、愛国詩人杜甫の面目を強調する余り、青少年時代の追憶との結びつけが薄弱なのではないか。当時の杜甫に亡国の惨状を実見した愛国の情念が沸き上がったことは否定できないが、杜甫の目下の解決すべき急務は今日明日の生活の工面、戦乱で離散した一族の再会を実現することではなかったか。

③特徴……時に杜甫は安祿山軍の捕虜となり、長安に幽閉されていた。妻子はこれより早く北方郊外の鄜州に疎開させており、杜甫——妻子は分離を余儀なくさせられていた。「家書抵万金」とは、遠く離れた家人（妻）からの書

簡が戦乱の為に得難くなっていた状況を指しており、杜甫の家族を思う心情を吐露した表現である。杜甫の遠地にある妻への思いは、その前年に詠まれた「月夜」詩（〇一四一）にも、

今夜鄜州月 閨中只獨看
今夜鄜州の月 閨中只だ独り看るならん

として、家族としての妻を、それまでの六朝貴族文学史上の閨中の觀念でない、新鮮な眼で詠んでいる。

三 憶弟二首其二（弟を憶ふ二首其の二、〇二四九）

続いて「憶弟二首其二」は、戦乱によって別離した兄弟を思う詩である。詩中に、花・鳥に関する酷似した表現がある。

且喜河南定	不問鄴城圍	且 ^か つ喜ぶ	河南定まれるを	鄴城の圍まるるは問はず
百戰今誰在	三年望汝歸	百戰	今は誰か ^{おのづか} 在る	三年 汝の帰るを望むなり
故園花自發	春日鳥還飛	故園	花は自ら ^{おのづか} 発 ^さ き	春日 鳥は還 ^な ほ飛ぶ
斷絶人煙久	東西消息稀	人煙	断絶して久しく	東西 消息稀なり

【説明】

この詩は乾元二年（七五九）作。即ち「春望」より二年後の作品である。杜甫四十八歳の同じ春に洛陽の別荘陸渾莊に於いて詠まれた。注目すべきは、原注に「時に歸りて河南の陸渾莊に在り」とあることである。陸渾莊は十八年前、天下「壯遊」（〇九五五）を終えた三十歳の杜甫が、「三十にして立つ」べく、楊氏との婚姻を機に新築した杜家一族の団欒の拠点である。間もなく杜甫が生涯漂泊の旅に出ることを考えれば、杜甫は旅立ちの直前、当時既に無人であった思い出深い陸渾莊に別れを告げに来たものと察せられる。「三年汝の帰るを望む」の「汝」とは、安祿山の乱によって音信不通となっていた直ぐ下の実弟杜穎である（後に無事に山東の役人となっていたことが判

杜甫の「望郷」と兄弟愛

明した。後述)。「故園」は洛陽に建てた一族の別荘陸渾莊を指す。杜甫が山東の杜穎に対して、「我々杜一家の懐かしい陸渾莊は、今も変わらず春には美しい花が咲き、空には春の鳥が飛んでいるよ(早く一族が再会して昔のように団欒したいものだ)」と呼びかける構図である。してみれば、杜甫にとって「春の花が咲き、鳥が飛ぶ」楽園とは、第一にその少年時に一族が楽しく団欒した洛陽の思い出の象徴であると考えられる。この詩は、「春望」から二年後、故郷の洛陽を後にする際、もう三年も行方不明の下弟の身を案じて回顧した詩であると筆者は考える。

四 得舍弟消息 (舍弟の消息を得たり、〇二二六)

風吹紫荆樹	色與春庭暮	風は吹く	紫荆樹	色は春庭と暮る
花落辭辭枝	風迴返無處	花は落ちて故枝を辞し	風は廻りて返るに処無し	
骨肉恩書重	漂泊難相遇	骨肉 恩書重し	漂泊して	相遇ふこと難し
猶有淚成河	經天復東注	猶ほ涙の河を成し	天を経て復た東に注ぐ有り	

【説明】

『杜甫詩集』には、この詩と同題の詩を四篇収める。本稿では、第四(〇二二六)、五章(〇二五〇)においてそれぞれ検討する。本詩は乾元二年(七五九)、長安での作品。杜甫四十八歳。時に肅宗治下、長安で左拾遺に任じていた。第一二句に、長安で宮官に就いた安堵感が滲む。杜甫自身は肅宗下で官吏となっており、「紫荆樹」・「春庭暮」等の詩語に宮中の官吏たる安堵感が滲む。

五 得舍弟消息 (舍弟の消息を得たり、〇二五〇)

亂後誰歸得	他鄉勝故鄉	亂後誰か帰るを得ん	他郷は故郷に勝らんや
直爲心厄苦	久念與存亡	直だ心の厄苦するを為すのみ	久しく念ふ 存亡を与にせしを

汝書猶在壁 汝妾既辭房 汝が書は猶ほ壁に在り 汝が妾は既に房を辞す
舊犬知愁恨 垂頭傍我牀 旧犬は愁恨を知り 頭かうべを垂れて我が床に傍そばふ

【説明】

舎弟は、杜甫のすぐ下の実弟杜穎を指す。作詩場所は前詩（三）に同じ。戦乱中に音信が絶えた。後に山東の役人として無事である事を聞き、安堵する一方、杜穎になついていた愛犬や侍女の行方にまで配慮した詩であり、杜甫の実弟への愛情が具体的に滲み出た詩である。第二句「他郷は故郷に勝らんや」からすると、杜甫は実弟の山東就職の知らせに安堵する一方、今後彼が異郷の山東に居つき、永遠に洛陽に帰郷しない新たな心配が生じたものと解釈する。

六 恨別（別れを恨む、〇四二〇）

洛城一別四千里	洛城にて一別して 四千里
胡騎長驅五六年	胡騎 長驅して 五六年
草木變衰行劍外	草木変衰するなか 劍外を行き
兵戈阻絶老江邊	兵戈に阻絶され 江辺に老ゆ
思家步月清宵立	家を思ひては 月に歩み 清宵に立ち
憶弟看雲白日眠	弟を憶ひては 雲を見て 白日に眠る
聞道河陽近乘勝	聞道 きくなら く 河陽は近ごろ勝ちに乗ずと
司徒急爲破幽燕	司徒 急ぎ為に幽燕を破れ

【説明】

制作年、制作地は上元元年（七六〇）、成都。杜甫四十九歳。制作したのは晩年だが、中に洛陽を後にした苦難の歴史を回顧する^③。

杜甫の「望郷」と兄弟愛

乾元二（七五九）年、四十八歳の杜甫（七一二～七七〇）は、家族と共に故郷の洛陽に別れを告げ、中国西北部へ向かって苦難に満ちた大旅行を開始する。直接の原因は、四年前の安祿山の乱や引き続いて起こった一帯の大飢饉等によって、生活の基盤が失われた事によるが、実際の事情は良く分からない。杜甫だけでなく、当時の全ての住人に降りかかった自然と人事の大災害を、杜甫はともかく西北郊外への避難によって乗り切ろうとした。単なる飢饉ならば、当時既に開通していた大運河等を利用して、江南への回避も現実的であったろうが、当時杜甫は、至徳元載、北方寧夏の靈武に於いて即位し、甘肅鳳翔に滞在中の肅宗治下において、左拾遺を拝命しており、一家挙げでの西北方に向けての洛陽脱出は、当然その左拾遺の役職と連動したものであったと考えられる。多く人は自らの青少年時を華美に追憶しがちであるが、まして内乱でその生存すらも定かでない状況にあつては、痛念の深刻さは想像を絶する。やっとの思いで成都に到着した杜甫が親族の苦難を思い、昼夜が逆転するほどの深刻な悩みに陥ったことは当然である。此の詩は、故郷の洛陽で親族に別れを告げ、二千 km 離れた四川成都にもかく落ち着いた後、戦乱の中で行方知らずとなった実弟杜穎の無事を祈る「家長」杜甫の心配が露わである。第五六句「思家歩月清宵立 憶弟看雲白日眠」とは、連日の強行日程や行方不明の下弟の安否不安で、ノイローゼ状態であった当時の杜甫の精神状態をリアルに表現する。

七 月夜憶舍弟（月夜舍弟を憶ふ、〇三〇四）

戍鼓斷人行	邊秋一雁聲	戍鼓	人行斷え	辺秋一雁の聲
露從今夜白	月是故鄉明	露は今夜より白く	月は是れ故郷のごとく明らかなり	
有弟皆分散	無家問死生	弟有るも皆分散し	家の死生を問ふ無し	
寄書長不達	況乃未休兵	書を寄するも長く達せず	況や乃ち未だ兵を休めざるをや	

【説明】

秋の夜空に仄見える月を眺めつつ、戦乱で連絡がつかない弟たちを思い遣って詠んだ詩。乾元二年（七五九）七

月一日、秦州（甘肅天水）での作。杜甫四十八歳。秦州（天水）は湧水に恵まれたシルクロード東方のオアシス都市。洛陽を後にした杜甫一行は、「三吏三別」に描かれた民人の苦難を自分も共に経験し、続く同谷県でも極限の苦難を味わったが、天水では飲水に限れば比較的潤ったであろう。舎弟は二弟杜穎、三弟杜豊。四弟の杜占は杜甫に同行していた。

第三句「露從今夜白 月は故郷明」とは、季節は今日から白露となるが、夜空の月は弟たちのいる故郷の洛陽でも同じく出ており、彼らはそれを見て旅先の杜甫を思っていることだろうの意。但し七月一日の月は新月。ここは杜甫の詩内容の変換が見られる。

第五六句「有弟皆分散 無家問生死」とは、杜甫の二弟の杜穎や杜豊、その他の堂弟たちも今はみな分散して行方不明となり、安否の尋ねようも無い、の意。「家」は「人」を表す軽い敬語であり、家屋の意ではない。なお、本詩の総合的な解釈については、松浦友久編『続校注唐詩解釈辞典』⁴⁾に詳しい。

八 乾元中、寓居同谷縣、作歌七首其三

（乾元中、同谷県に寓居し、歌七首を作る 其三、〇三六六）

有弟有弟在遠方	弟有り 弟有り 遠方に在り
三人各瘦何人強	三人とも各各瘦せて 何人か強からん
生別展轉不相見	生別展轉として相見え ^ま ず
胡塵暗天道路長	胡塵天に暗く 道路は長し
東飛駕鵝後驚鷗	東に駕鵝飛び 後には驚鷗
安得送我置汝傍	安んぞ我を送りて汝が傍に置かん
嗚呼三歌兮歌三發	嗚呼 三歌せん 歌は三たび発す
汝歸何處收兄骨	汝帰らば 何処にか兄の骨を収めん

杜甫の「望郷」と兄弟愛

【説明】

乾元二年（七五九）、同谷県（甘肅）。七首連作の一。杜甫四十八歳。その一は嚴寒の中、白髪頭の杜甫が生活の為に野猿同様の辛酸をなめていることを、其の二は山雪の中、山芋の掘り出しに失敗して家に帰ると、子女が空腹で呻いている様子を、其の三は流浪中に相談すべき兄弟はいても生き別れの今は兄たる私の行き倒れの遺骸を弔うこともかなわない嘆きを、其の四は遠い南国に入る妹たちと会えない嘆きを、其の五は同谷の山中をさまよう私の帰郷の思いを、其の六は同谷山中の龍潭に棲むという龍に託して強い帰郷の思いを、終章其七は「男児成不成名、身已老」として、男児たる自分の不甲斐なさを描く。

第五句「駕鵝」「驚鷗」は、雁や鶴の一種。兄弟仲良く並んで空を飛ぶという。杜甫の兄弟に喩える。終句において、杜甫は自分が死去した際の杜一族の後任を下の弟の杜穎に期待していたとさえ思われる。

九 傷春五首其二（春を傷む五首 其の二、〇七一二）

鶯入新年語	花開滿故枝	鶯は新年に入りて語り	花は開きて故枝に満つ
天清風卷幔	草碧水連池	天は清く 風は幔を巻き	草は碧にして 水は池に連なる
牢落官軍遠	蕭條萬事危	牢落せる官軍は遠く	蕭条として万事危し
鬢毛元自白	淚點向來垂	鬢毛 元自ら白く	涙点 向來垂る
不是無兄弟	其如有別離	是れ兄弟の無きにはあらねど	其れ別離有るを如せん
巴山春色靜	北望轉逶迤	巴山春色静かなり	北のかたを望み 転た逶迤す

【説明】

広徳二年（七六四）、四川閬州での作。杜甫五十三歳。自分に頼るべき兄弟はあるが、戦乱中に兄弟と連絡が取れないもどかしさと不安を述べる。身は遠く四川にいて、助け合うべき兄弟はいても別離してはどうしようもない嘆きを述べる。

十 送舍弟穎赴齊州三首其二（舍弟穎の齊州に赴くを送る三首 其二、〇七八六）

風塵暗不開 汝去幾時來 風塵暗くして開けず 汝去れば幾時か来たらん
兄弟分離苦 形容老病催 兄弟 分離に苦しみ 形容 老病を催す
江通一柱觀 日落望鄉臺 江は通づ 一柱の觀 日は落つ 望郷の台
客意長東北 齊州安在哉 客意 長へに東北 齊州 安くに在りや

【説明】

山東の役人の任に赴く実弟の杜穎を見送った詩。杜穎は杜甫が最も信頼していた直ぐ下の実弟。安祿山乱や黄河の氾濫で通信が途絶え、杜甫を苦しめたが、やがて再会した。ここは、その仲良しの兄弟が分離して住む苦しさを述べる。

十一 客居（抄）（客居（抄）、〇八六三）

我在路中央 生理不得論 我れ路の中央に在りて 生理 論ずるを得ず
臥愁病脚廢 徐步視小園 臥して愁ふ 病脚の廢するを 徐ろに歩みて小園を視る
短畦帶碧草 悵望思王孫 短畦 碧草を帯び 悵望して王孫を思ふ
鳳隨其風去 籬雀暮喧繁 鳳は其の風に随って去り 籬雀暮れに喧繁たり
覽物想故國 十年別荒村 物を覽れば故国想はる 十年 荒村に別れたり
日暮歸幾翼 北林空自昏 日暮れて幾翼か帰る 北林は空しく自ら昏し

【説明】

大暦元年（七六六）、四川雲安、杜甫五十五歳。肅宗下で左拾遺の官は得たものの、家族連れの放浪の旅は生活設計が相当に厳しかったようだ。加えて持病の脚氣が進行し、健全な旅行に不安があった。杜甫が帰郷の手段として

杜甫の「望郷」と兄弟愛

船旅を選択したのは、旅費の節約と共に、脚気の為ともみられる。

第一句「生理」は生計の意。第九、十句「覽物想故国 十年別荒村」は、辺境の四川において、見聞きする物全てが十年前に別れた故郷洛陽（の陸渾荘）にことづけて思い出されとの意であり、この前後の杜甫作品が故郷洛陽の風土に比較して描かれていることで立証される。

十二 第五弟豊、獨在江左、近三四載、寂無消息、覓使寄此二首其一

（第五弟豊、独り江左に在り、近三四載、寂として消息無し、使を覓めて此に寄す二首

其の一、〇九七九）

亂後嗟吾在 羈棲見汝難

乱後 吾が在るを嗟く 羈棲 汝が難を見る

草黃騏羈病

沙晚鵲鵲寒 草は黄ばみ 騏羈は病み 沙晚れて鵲鵲寒し

楚設關城險 吳吞水府寛

楚は関城の險しきを設け 吳は水府の寛きを吞む

十年朝夕淚 衣袖不會乾

十年朝夕の淚 衣袖 曾て乾かず

【説明】

大曆元年（七六六）作。杜甫五十五歳。四川夔州にて。第五弟の杜豊は一説に杜穎を指す。十年前に洛陽で別れて以来（「恨別」詩参照）、生存の情報がとぎれた実弟の安否に涙する杜甫の不安な心情が、ここに羅列したその他の詩篇と同様、包み隠さず吐露されている。

十三 まとめに代えて

以上、杜甫の詩から、兄弟を詠んだ詩例十一篇を中心に検討を加えた（この他、四川や山東で再会した杜観や杜

穎に関する詩等もあるが、紙幅の関係で省略した)。検索目的に応じた詩例が次々に検索し得たことは幸運であったが、実のところ、杜甫の行方不明の実弟を思う真情がこれほどまでに強烈で深刻なものであったことに驚いている(杜甫の従兄の四兄について述べた「狂歌行」(〇八二八)は言及を省略した)。筆者の読書歴は浅いが、これほどに兄弟の安否を心配する詩例を、筆者は、その他の詩人を含めて知らない。杜甫が兄弟に対して持っていた愛情は、時限が異なるとはいえ、ある意味で国家に対する愛情以上のものであったのではないか。

冒頭に述べた「春望」の花鳥問題の解釈に戻れば、当時の杜甫の最大関心事は国家ではなく(それは当然として)、兄弟にあったと言えは過言であろうか。以下、このことに関連し、本論稿を纏めるに当たり、付随する問題として、以下の二点からこの問題を捉え直してみたい。論拠の引証は甚だ困難であるが、問題の考察に少しでも役立てば幸いである。

(一) 杜甫の旅行に同行した家族と「杜甫詩集」成立の関係

杜甫は今日でこそ詩聖として中国文学史上最高の評価を受けているが、生前はむしろ無名の詩人であり、湖南で客死しても当初は墳墓の在処さえ判然としなかった。その偉大な詩業が文壇に知られるようになった顕著な出来事は、杜甫の孫にあたる杜嗣業の依頼によって撰した元稹「唐校工部員外郎杜君墓係銘」が公表されて以来のことである。この時まで約半世紀、杜甫の詩名は世間に知られていなかった。杜嗣業、及び元稹の業績は極めて大きい。まず、杜甫の詩作を纏めるという作業は、当初杜甫一族の営為によって伝承されたものであることを確認しておきたい。杜甫詩集のうち、乾元二年(七五九)から始まる故郷洛陽を後にしての大旅行は、竟に帰郷することの無い死出の旅であった。杜甫は旅の途中に種々の詩作を残すが、これらはどのようにして詩作され、清書されて、後世に伝承されたのだろうか。興味あるテーマであるが、立証は甚だ困難である。しかし、残された詩文を丹念に読み進むと、杜甫詩集の成立に関して、ある仮説の提示が可能であるように思えてくる。それは、旅に同行した杜甫の親族、就中、実弟の穎、豊か、また実子の杜宗文・杜宗武の助言または協力である。年譜を見れば分かるように、特に四川、湖北時代の杜甫は、某地毎に数年数ヶ月滞在しながら、時には耕作しながら旅行を続けている。これら

の日々を体力に乏しい杜甫は何に消費したか。それは、今日残された詩文が雄弁に物語る。即ち、土地土地の有力者との宴会、名所旧跡の訪問記録がそうである（中でも有力者訪問は最晩年の湖南省においては頻度が高くなり、どうやら杜甫は帰郷の旅費、便宜等の工面に奔走していた嫌いがあることについては後述する）。およそ学術論文らしからぬ立証を欠いた叙述であるが、杜甫は旅先で時間を工面しては、その間書き貯めていた詩稿の整理に取り掛かり、実弟や実子の記憶や記録を加えつつ、旅中の詩稿を次第に増多していった過程が考えられる。

（二）杜甫の若年期作品の散逸

ここで、二十代以前の杜甫作品の散逸問題に言及しておきたい。周知のように、現存の杜甫詩には、文はもとより三十歳以後の作品が極めて少ない。このことについて、筆者が目睹し得た近年の論考は少ないが、およその情況を注に記載する⁽⁵⁾。

中でも、佐藤浩一氏は「流通の過程で散逸した」と方向付けられる。以下、拙稿は佐藤論に啓発を受け、筆者の想像を加える。

まず天宝十三載（七五四）、玄宗の徴士に応じた杜甫（四十三歳）の「進鵬賦表」に、貴重な自己記録がある。

自七歳所綴詩筆、向四十載矣、約千有余篇。（七載より綴る所の紙筆、四十載に向^{なん}んとして、約千有余篇あり。）

三十三年間に詩文千余篇の作品数は、年三十篇、二月に五篇、相当な作品数である。内容は不明だが、大半は科挙受験の為の模擬答案と考えられる。無論、通常の近体詩も含まれていたか。そして、それらのうち、比較的読むに耐え、科挙及第に役立ちそうな数篇は、別途大切に保管していたと考えられる。

それは何処か。杜家一族の拠点でもある陸渾莊である。拙稿でも上述した「恨別」「憶弟二首其二」に言及する陸渾莊には、杜甫の初期詩文稿が山と積まれていたと想像するのは、強ち無理な想定ではないであろう。陸渾莊は杜甫一族の大切な絆の拠点であるが、その建物は今も続く伝統的な窯洞造りである。七四一年、その完成時には杜甫

の七歳（筆始め）から三十歳までの詩文（科挙受験模擬答案から書道練習帳、詩作まで種々の作品を含む）が大切に保管されていたことであろう。しかし、上述の様々な事情によつて杜甫一族が洛陽を後にすると、途端に図書保管事情は一変する。まず、目的の定まらない漂泊旅行に図書を携行することは許されない、一定の場所に保管するとしても水や火気を含めて安全は担保されない、等々の事情である。書誌学者の指摘を待つまでもなく、紙製の図書が散逸する大敵は火気・水・書虫であるが、現実の場では、加えて、無知・無視の問題がある。即ち、生命を賭けた大旅行の出発に当たつて、杜甫のそれまでの佳作集は、例えそれが命よりも重要だと一同が認識したとしても、旅行に携行することは許されない。やむなく信頼に足る知人や機関に預けるなり、廉価で売却することになる。杜甫が書き残したと証言する三十年間の多数の詩篇は、このような情況から戦下の日常情況下において、管理不能となり、自然消滅を免れなかったのでは無いだろうか。この点、白居易の詩文集七十六巻が著者の管理下に置いて順調に詩篇を蓄積していているのとは雲泥の差がある。

紙製の図書は、火事（戦火・火災）や水害等で散佚し易い。印刷術が発達する以前の手書きの時代であれば尚更である。この他、実は関係者（伝承者）の無知・無視による伝承の断絶も見落とすことができない。確かな根拠に基づく論術が困難な今、推論に頼らざるをえないが、その三十余年間に千余篇もの記録がある作品が現在殆ど伝承しないのは、本論稿で述べ来たつた漂泊人生の然らしむる当然の結果であつた。あたかもその作品を社会に公表した次世代の元稹の友人白居易が多くの詩文を今日に伝えている現象と好対照を成している。

注

- (1) 『中国文学論集』第五十二号、二〇二三年。
- (2) 引用詩題に付した四桁番号は、下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』（講談社学術文庫、二〇一六年）による。
- (3) 「恨別」詩については筆者の前稿参照。なお、杜甫の親族・友人・知人等については、陳冠明・孫懷婷『杜甫親眷交遊行年考』（上海古籍出版社、二〇〇六年）参照。

- (4) 松浦友久編『続校注唐詩解釈辞典付歴代詩』(大修館書店、二〇〇一年)、三三八～三三二頁。
(5) 陳尚君「杜詩早期流伝考」

『唐代文学叢考』所収、中国社会科学出版社、一九九七年。初出一九八二年
佐藤浩一「杜甫における若き日の詩——散逸、それとも破棄」

(早稲田大学『中国古籍文化研究』稲畑耕一郎教授退休記念論集)下巻、東方書店、二〇一八年)
長谷部剛『杜甫詩文集の形成に関する文献学的研究』(関西大学出版部、二〇一九年)等。